

研究ノート

バリの風土と家系についての考察 (Ⅶ)

松原正道

序

本研究は、平成5・6年度、淑徳大学研究助成費をえて、故森泉宗平教授との共同研究として始まったが、同教授の退職後は、松原の個人研究として継続されてきた。

そして、平成17年度には、再び、大学の研究助成費をえて、更に、研究が進められることになり、これは今後にも継続されていくのである。

本研究は、かねてよりの知己である、バリ（島）、タバナン旧王国（県）の王族オカ・シラグナダ Oka Silagnada氏とその一族の系譜と現状を通して、バリ（島）と周辺地域、就中、隣接のジャワ Jawa（島）との関わりについて、歴史的背景とその現状を探るものである。

だが、ヨーロッパからみた東インド、即ち、インドネシア地方は、古来、他の民族、国々との関わりが強く、歴史的にみていうならば、古くは、インド、サラセンといわれるアラビア、ペルシア等、また、中国、そして、近隣のマレー半島、インドシナ半島等の人々、更には、近代になると、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス等、ヨーロッパ列強による大航海時代と、それに続く海外進出、帝国主義時代との密接な関係を以て発展してきているのである。そして、それは、戦国時代とそれに続く時代の海外雄飛、更には、20世紀に至り、太平洋戦争との関わりで日本とも密接な関係をもつことになるのである。

従って、「バリの風土と家系」といいながらも、バリ（島）を含む東インド（インドネシア地方）は、こうした他の民族との関わりなくして考えることはできず、特に、現在、観光を州の行政の大きな柱としているバリ（島）には、世界各国から様々な人々が来訪しており、そうしたことも、その歴史的背景と結びつく一面があるといえる。

また、バリ（島）は、イスラム教色の強いインドネシアにあって、「ヒンドゥー（バラモン）教の島バリ」といわれるわけなのだが、これは、古い時代に、ヒンドゥー（バラモン）教がインドから渡来してきたことに由来しているのであって、ここにも、明らかに、他の地域との関わりをみるができるといえるのである。そして、そういうことから、今日、バリ（島）は、ヒンドゥー（バラモン）教色が強くはあるが、イスラム教、キリスト教、それは、

カトリックもプロテスタントも共に存在するのであって、そうした状況からも、バリ（島）の歴史的背景を考えさせられるところなのである。

既にみた通り、往時、バリ（島）は一つにまとまるのが難しく、そこに、オランダにつけ入れられる「スキ」を与えたのであるが、8つの王国が割拠しており、それが、今日の県となっているわけであるが、これらの王国は隣接する地域、特に、西のジャワ（島）、東のロンボック（島）等の関わりを以てその歴史が展開されてきているのである。中でも、ジャワ島は、強国が存在したということから、その影響は大きいものがあった。

そうした点から、これまで、本研究Ⅰ～Ⅵまでは、そうしたジャワ（島）とインド、サラセン、そして、ヨーロッパとの関わりを通してバリ（島）について眺めてきたわけである。

本稿では、平成17年夏のバリ（島）、18年春のバリ（島）ジャワ（島）探訪により、そこでえられた情報をもとに、それをまとめてみることをしてみたい。

特に、オカ氏を始めとする日本統治下の経験を有する人々からの聞き取り調査を中心に、その中でも大きな問題だった「米」について、「ロームシャ」について、そして、オランダのバリ（島）統治の発端をなすこととなった、北部バリ（島）のブレレン王国への侵攻、中でも、侵攻の重要な舞台となったジャガラガ（村Desa地区）のそれについて焦点をあてて考察を加えてみた。

本稿執筆にあたり、オカ・シラグナダ氏、叔父のアグン氏等のオカー族、国立ウダヤナ大学歴史学教授で、東部のカラングASM旧王国の王族であるドクター・アナック・アグン・グデ・プトゥラ・アグン、東京大学で博士号を取得し、インドネシア外務省、工業省に勤務し、現在は、農業に従事し、地域の指導的立場に立っているドクター・グデ・グリア、そして、国立バリ工科大学日本語講師、その名前からしてキリスト教徒で、プロテスタントのリタ・マリア・サハラ氏を中心にして情報をえた。特に、親日家のドクター・グデ・グリア氏からは貴重な情報をえた。

また、インドネシアでは、旅行社を介して車をチャーターすると、ドライバーと



情報提供者

オカ氏（左）、ドクター・アグン、アグン氏、筆者（右）



情報提供者 ドクター・グデ・グリア（右）、筆者

共に、ガイドがつくという商習慣があるため、旅の途次で出会った彼らからも貴重な情報をえることができた。

I

(1) 米問題について

バリ（島）において、日本統治時代の話題として、オカ氏等との話の中で、最初に出てきたものが、米問題であり、それは、ジャカルタでの話でも同様だった。

オランダ統治時代は着る物には困ったが、日本人（軍）がきた1943年以降は、米の不足が生じ、大変な思いをしたという旨について話をされたわけであるが、日本人にとって、米は主食として重要な食糧であり、太平洋戦争の勃発と共に多くの将兵が米食を常とする東南アジア各地に出かけて行ったのであるから、これらの地域の米について影響ができたであろうことは理解に難くない。

その点で、現地における米事情は如何がなものであったのだろうかということを考えてみる。

これに関連して、ジャワJawa（島）のジャカルタJakarta東郊のブタウィBetawi族の住む町チョンデCondeにおける、77・8歳位（インドネシアでは、年配者の中には、自分の正確な年齢が分らない者がしばしば見うけられた）で、地域に小学校はあったが、入学はせず、農業の手伝いや、木材の伐採に従事していたというマツト・ハイルMat Hair氏とその一族と話をした際、彼が若い頃住んでいた、チョンデの町の一部を形成するバレ・カンバン村（地区）Desa Balle Cambanにおいて、日本人（軍）によって「米をとられた」（傍点は筆者）



情報提供者 マット・ハイル氏（中央）、筆者（左）

というのであった。

また、ジャカルタにあり、インドネシアにおけるカトリックの中心であって、ジャワ（島）に3人いるという枢機卿のうちの一人在るサンタ・マリア・カテドラル Santa Maria Catedralの管理責任者プラディプタ Pradipta氏によると、日本人（軍）がやってきた時、氏が小学生だったのだが、子供心にも、生活の苦しさを味わったとのことだった。

特に、食糧については、配給券が配られはしたが、それでえられたものは、質が悪いものだったという話でもあったが、その点では、バリ（島）で聞いた話と符合する点でもあった。

現在は、米余りが問題の一つとなっはいるが、古来、瑞穂の国といわれてきた日本にとって、米のもつ意味は大きく、これをめぐって、バリ（島）を含むインドネシア、そして、米作を行う東南アジア一帯で、現地の人々と日本人との間に問題が起こったとしても不思議はない。

その点で、筆者の会った、バリ（島）を含むインドネシアの人々で、オランダ統治を心良く思わない者でも、米については別問題であった。米について、オランダ統治時代には殆んど問題が起きることがなかったにも関わらず、日本人（軍）統治下では、これが問題になったわけであって、多くの人間が苦勞することになったということによって、日本人（軍）に対する思いを厳しいものにしてはいるのは事実である。そして、それは、今日においても、日本について問うた際、そのことが最初に話題にされるという点からして、余程、印象の強い事柄だったのであろう。「食べ物の恨みは恐い」か。

その点について、「太平洋戦争中の日本軍による短い占領は、戦闘による被害こそなかったものの、軍による過剰な物資の徴収によって、島民は歴史始まって以来ともいえる欠乏生

活を強いられた」⁽¹⁾といわれるのである。

特に、米については、日本とは違っており、「オランダはエステートで産出されるキャッシュ・クロップ（換金作物）に比べて、米には第二義的関心しか示さず、1930年代になって世界恐慌で東インドが深刻な打撃を受けるようになるまで米穀問題に関してはほとんど何の政策も打ち出さなかった」⁽²⁾という指摘がなされるように、他の物はともかく、米には関心を示すことが少なかったオランダだったため、インドネシアの人々にとって、米については、特に、問題はなかったようである。

だが、1930年代にアメリカで起こった恐慌が世界的広がりを見せ、それは、東南アジア地方、オランダの支配する東インド（インドネシア地方）にも波及してきたのである。それに伴って、オランダはそれに対応する施策を考え始め、特に、米については、「1930年代末には、東インド政府は米の安定した供給を確保するためにさまざまな施策を展開した」⁽³⁾といわれるように、1929年にアメリカで起こった株式市場の暴落から始まった世界恐慌に影響される形で、オランダ植民地においても米の問題が取り上げられるようになったわけであり、そのために、「1939年には食糧改善基金（Voedingsmiddelenfonds）が経済省の監督下で設立された。これは食糧供給を推進し、食糧の輸出と国内流通を振興するためのものであった」⁽⁴⁾といわれるように、その施策を転換していこうとしていたところに、日本軍による侵攻が始まったのである。

そして、日本人（軍）統治下の諸施策の中での最重要課題の一つに米問題があったのである。

それについては、「日本軍政当局が、秩序だった食糧獲得に向けて最初の措置をとったのは、1942年8月になってからであった」⁽⁵⁾といわれるところのものだったのだが、インドネシアにおいては、「1943年4月の新米穀年度の開始とともに米の自主販売は完全に禁止となり、農民には生産物の一定量を軍政当局に供出義務－初めの強制供出－が課せられた」⁽⁶⁾という形で以て米についての施策が展開されていったのである。

そして、それは、日本軍が侵攻した東南アジアにおいてインドネシア、特に、ジャワ（島）は特別の役割を果たす形で行われていくことになり、「日本の支配下においては、ジャワは、外島、英領マレー、シンガポール、さらに南太平洋の戦場へ米を供給する役割を課された」⁽⁷⁾といわれる形で具体化されることとなったのである。

こうした、ジャワ（島）のあるインドネシア、更には、米作地帯である東南アジアにおける米問題の背景として、「米は人間生活の絶対必需品にして、第一に充足せざるべからざるものである。従って我々の考え方はまず内地の需要の充足、次に南方の交流を考慮すべきである」⁽⁸⁾といった、瑞穂の国の民といわれる、日本人独特の米に対する考え方がその根底にあったということと、「大東亜共栄圏」といいながらも、日本優位の思考が先行した考え方

(5)

がその根底に介在していたのである。

それは、更に、1943年（昭和18年）において、「南方地域より内地への輸送米は、物動計画により今年度仏印、泰、ビルマ合計160万トンにして、来年度は180万トンの旨、7月1日付閣議決定せらる」⁽⁹⁾という、日本国内における米事情に基づいた政治決定に結びついたものとして、東南アジア一帯において現実化されていったのである。

そして、そこには、その背景にあった、「昨年度に於ける内地の米の生産高はすこぶる不況にして、昨年度の繰越米750万石なりしにかかわらず、今年度繰越米は僅か50万石の予想との事なり」⁽¹⁰⁾という記述にみられる、日本国内の米の兎作といった深刻な状況を日本政府が抱えており、それに基づいた閣議決定であったということが窺い知れるのである。

従って、それは、日本軍が侵攻した、米食を常とする地域一帯に影響を及ぼすこととなり、インドネシアへも波及していったのである。それも、ジャワ（島）は、他にはない特別の役割を果たすことを以て行われたのである。

こうした日本国内における稲作の状況と、それに伴う日本政府の決定が、バリ（島）のオカ氏等、ジャワ（島）のマット・ハイル氏等の米に関する話へと具体的につながっていったということになるわけなのである。

第二次大戦、太平洋戦争という戦争のダイナミズムに基づいた動きの一貫として、食糧問題が大きな事柄の一つとして取り上げられることになったわけであり、これによって米食を常とするアジア各地の人々に、大きく問題を投げかけることになったわけである。そして、それが、具体的にインドネシア、バリ（島）にも波及したということになったわけである。

(2) ロウムシャ（労務者）問題について

バリ（島）、インドネシアにおけるもう一つの大きな問題として、日本国内においても、また、日本人（軍）統治下のアジア各地において有名だ（悪名高かか）った「ロームシャ（労務者）」についての問題がある。これについて、オカ氏等は、「バリ（島）にはロウムシャはいなかった」と言っていたのだが、ジャワ（島）のチョンデの町のマット・ハイル氏の話の中で、彼自身、厳しい労働をさせられたと言っていた。

オランダ人は、彼の住んでいたバレ・カンバン村では村民を苦しめることはなかったが、彼の住いから少し離れた所に駐屯していた黄色い制服を着た日本兵からは、無料で木の伐採や、爆撃をうけていた飛行場の近くで洞窟のようなもの（防空壕？）を掘らされたり、建物を建てさせられたりしたので、オランダ統治時代と比べて、「10倍も苦しかった」（傍点は筆者）と言っていたのであるが、オカ氏等が言っていたことと比べて、マット・ハイル氏が従事した労働についてどう考えたらよいのだろうか。

明らかに、彼の従事した労働は「ロームシャ」のそれといえるのではないだろうか。

同氏にみられる如く、ジャワ（島）においては、日本人（軍）のために労働に従事させられた現地の人々がいたことは事実であるが、乱暴なことや、犯罪的なことをしなければ、何もされることはなかったともいっていた。

この「ロームシャ」について、「もしインドネシア人が、日本軍政期で最も恐ろしい経験の一つあげるといわれたら、おそらく“ロームシャ”と答える人が多いであろう」⁽¹¹⁾といわれ、「このロームシャ（労務者）という日本語はインドネシア史の中では単なる『労働者』という意味ではなく、格別に苦い経験を思い出させる深い意味合いをもったことばである。すなわち、インドネシア人にとってロームシャとは日本の軍政下で過酷な肉体労働のために強制的に動員された労働者を意味する」⁽¹²⁾といわれるものだったのである。

そして、そこには、「南方圏に於て労働力の自給自足をなし得る地域はジャバ、ビルマ、泰、仏印にして（中略）、南方労働力の特長はその重要部分を占める者が馬來を中心とする支那労働者にして（中略）、元來、体力頭腦の点よりは支那苦力は優秀にして、温順、服従性の点よりはジャバ苦力が適当なり」⁽¹³⁾といわれている如く、日本人（軍）としては、ジャワ（インドネシア）人の労働力を期待していたことが知れる。

そして、「支那人は一般に、従来援将行為をなし来った者にして、これを直ちに東亜の同胞として友好性を認むべきかは問題で、政策上は彼等を敵性行為をなしたる者として取り扱うを適当とす。従ってこの際、ある程度の圧迫を彼らに加え、鉦工業以外の労働をジャバ人を以て代えるを現下の一策にして、この際ジャバ人の南方進出を促す必要あり」⁽¹⁴⁾という中国人に対する不信感からこれを嫌い、ジャワ人が良質の労働力として期待されていたため、「ロームシャ（労務者）」として重宝がられて働くことになってしまったのである。

こうした中で、オカ氏等のような上流階級（王族）が、バリ（島）には、「ロームシャはいなかった」といっているわけであるのだが、オカ氏、叔父のアグン氏、ドクター・アグン等は共に王族であるため、オランダ統治下、および、日本統治下でも一般庶民との在り方（取り扱い）が違っていたと思われるわけなのである。

だが、マット・ハイル氏のような人は労働をさせられたわけで、彼が、どのようにして労働をすることになり、どの位の期間それに従事していたか定かではないが、厳しい労働があったことは事実で、ジャワ（島）でそれに従事した人々を倉澤氏は「ロームシャ」といっているのである。従って、それは、バリ（島）とジャワ（島）との違いなのだろうか。

そして、バリ（島）においては、オランダは、「“土着の機構”を間接統治に利用するために、上層の僧侶・王族・貴族に属する者とそれ以外の平民をはっきり区別し、上層の者には道路補修などの強制労働を免除するなどの特権を与えた」⁽¹⁵⁾と指摘されるのであるのだが、これは、日本統治下では如何がだったのであるだろうか。オカ氏等からは、労働をさせられたという話を聞かされたことはなかった。

そして、「バリにはロームシャはいなかった」とのことだが、このことと、ジャワ（島）には「ロームシャ」がいたという事実とはどう考えたらよいのだろうか。この点については、今後の課題として考えさせられるところである。

このインドネシア（ジャワ）人「ロームシャ」の存在について、戦時下の東南アジアにおける日本人（軍）の事業のうちの大きなものの一つにタイとビルマを結ぶ415キロメートルに及ぶ泰緬鉄道の建設があったのだが、そこに多くの現地の労働者や連合軍捕虜が携わったが、そうした中に、多くのインドネシア（ジャワ）人労働者がいたのである。これに関して、「ロームシャとして、あるいは鉄道関係の織工として、泰緬鉄道建設のために、ジャワからタイ、ビルマ国境地帯に送られた。そして生き残って終戦を迎えたが、対日協力者と見なされて処刑されるのではないかと恐れて、多くはタイ人の集落に身を隠し、土地の人に助けられて暮らすうち、土地の女性と親しくなって一緒になったものである。（中略）、彼らはやがて連合軍に救助されて、帰国の機会を得たのであった」⁽¹⁶⁾といわれる、インドネシア（ジャワ）人「ロームシャ」に関わる問題があったのである。

そして、それは、更に、「約500人も女性がこうしてインドネシアへやって来たという。ところが、文化、習慣、宗教の違うなかで多くは結婚生活がうまくいかず、離婚してしまった」⁽¹⁷⁾といわれ、こうした結婚生活の破綻の理由として、夫となった男性に既に妻がいたとか、イスラム社会のインドネシアであるため、夫が、別に妻を迎えるとかということが挙げられ、そうして離婚した女性の中には、生活のために身体を売っていた者もいたとのことである。

これも、「バリ（島）にはロームシャはいなかった」といわれている一面であり、インドネシア（ジャワ）人「ロームシャ」の存在に付随した新たな問題として考えさせられるところのものであり、「ロームシャ」がいなければ起こらなかった問題でもあったわけである。

II

バリ（島）北部ブレレン Beleden 旧王国（県）の都だったシンガラジャ Singaraja の近郊ジャガラガ Jagaraga 村（Desa 地区）にあるプラ・ダレム・ジャガラガ Pura Dalem Jagaraga 寺の寺守で60歳半ばのクトゥウ・スラドゥニヤ KT Suradnya 氏から、同寺およびその周辺の地域についての話を聞いた。

それによると、同寺は、オランダの侵攻に際して、住民による抵抗の拠点の一つとして重要な役割を果たし、周辺の地域と共に協力して、その防衛にあたった場所であったというのである。

その証しとして、また、人々の記憶に止めるためとして、寺の外壁に、その当時の状景を示すための浮き彫りが彫られているとの説明だったが、確かに、それをみることができた

し、写真に撮ることもできた。

そして、その時の同氏の話は、氏が作成した同寺についての説明書きと同じであった。それを書き写すならば次の如くなる。

プラ・ダレム・ジャガラガ
 死のジャガラガ寺 PURA
 DALEM JAGARAGA
 Jagaraga temple of dead

「死の寺」であるプラ・ダレム・ジャガラガ（筆者注 各村々〈Desa 地区〉は、通常、カヤンガン・ティガ Kayangan Tiga と呼ばれる三つの寺をもっており、それぞれの寺は、村の山側にあつて、村の活動の中心となり、共同体の繁栄を司るプラ・バレ・アグン Pura Balle Agung と村の起源寺であるプラ・プセ Pura Puseh とがあり、その他に、通常、墓地が付随している死者のためのプラ・ダレムが海の側にあるという形で構成されているのである。従つて、この寺は、ジャガラガ村（地区）の「死の寺」となるわけなのである）は、破壊の神の役割を果たすために、全ての生きとし生けるものに対して、転生 Reincarnation（プナルバワ PUNARUBAWA）、即ち、誕生、生きること（人生）、そして、死といった人間のサイクルについて申しわたしをする役割をもつシヴァ SIWA 神と、その妻であるデウィ・デュラゴ DEWI DURAGO が住む場所にあるのである。

プラ・ダレム・ジャガラガは、歴史的に価値がある寺の一つであり、それを示すもの



プラ・ダレム・ジャガラガ（旧ブレレン王国）

として、たとえば、カラングスム Karangasm 出身のグステイ・クトゥツ Gusty Kutut とジェロ・ジュンピリン Jro Jempiring (筆者注 ジェロとは王族の下にある親族) に率いられて戦われた戦争である「ペラン・ジャガラガ Perang Jagaraga (ジャガラガ戦争)」に捧げられたものである。(筆者注 そのため、クトゥツ・スラドゥニヤ氏によると、最近、カラングスム (旧王国) の王族が、同寺に参詣にきたということである)

オランダ人がくるまで、この村は、「デサ・スカプラ Desa Sukapura」と呼ばれており、「ジャガサリ Jagasari」といわれるスバック Subak (水利組合、共同体) の組織をもっており、それは、「スガラ・マデ Segara Made」と呼ばれる溜め池に囲まれた「死の寺」(Pura Dalem Jagaraga) をその中に取り囲んでおり、そこからは、肥沃な土地であるデサ・スカプラに水が注がれていたのである。

そして、現在のジャガラガという名前は、その時代の人々が、戦争に備えるために使った言葉に由来しており、それがもつ意味は、オランダ人がこの村の内外に侵攻してきた際、人々が、「互いに気をつけよう」といったということに基づいているのである。

ジャガラガの人々は、深い溝 Trench (塹壕) を掘り、「ポレン Poleng」と呼ばれ、致命傷を与えることができる伝統的な罾をしかけたり、また、「スピット・ウラン Supit Urang」と呼ばれる村の墓域に西から東に向ってめぐらされた砦 fortress (要塞) を築いたのである。

戦争によって、この村は、損害をうけ、死傷者が満ちあふれ、そのために、この寺はプラ・ダレム (死の寺) となってしまったのである。

戦争の後、およそ、1849年頃、村人は、この寺を修復して、彫刻と建物の構造の点で、他の村のそれとは違った建物のスタイルのプラ・ダレムを建設した。

その様式は、独特なものであり、それは、寺の彫刻にみられると共に、寺そのものも興味あるものであって、「家 House (建物)」は、そのために、特別の意味をもつものになっているのである。

そして、寺の正面の壁には、車を運転したり、ボートに乗ったり、また、自転車に乗ったオランダ人を画いた彫刻が施されており、また、飛行機に乗ってきたオランダ人をもみることができるのだが、これは、オランダ人が、陸地や海上からだけではなく、空からも攻めてきたということをも表わしているのである。

そして、ココナツの木に登っている人間、漁師、また、この地域での日常生活を表わしている伝統的な凧あげを表わしている彫刻もあるのだが、それとは別に、オランダの旗を持ち、ピストル (銃) を運んでいる (フォードのT型) の車を形どったものもあるのである。(次頁写真)

内部には、大きな魚と、人間を食べている鰐がその傍らに描かれている軍艦のための



プラ・ダレム・ジャガラガ外壁（旧ブレレン王国）

スペースがあるのだが、これは、オランダとインドネシアとの間の大きな戦争を象徴しているものなのである。

そして、また、寺の内部、あるいは、「ジェロアンJeroan」（筆者注 寺院は、通常、「奥の院」にあたる一番奥の聖域であるジェロアン、外庭のジャバJaba Tenga、それらの中にあるジャバ・トゥンガーJabaからなっているといわれる）⁽¹⁹⁾、そして、パドゥマサナ Padmasana（筆者注 太陽神スリヤSuryaの姿をしたシヴァ神のための石造りの祭壇）の左右にある幾つかの建物がある所に、戦争のことを描いた場所がある。

この寺の特徴は、ダレム・パデゥマサナ、プラジャパティ Prajapatiが同じ所に建っているというところにあるのである。

（精霊の家である）プラジャパティは、墓域に建てられるべきなのだが、多分、緊迫した戦争の状況から、プラ・ダレムの中に建てられたといえる。我々は、死の寺とダレムをいっているが、それは、この村の人が死んだ時、人々が、墓域に遺体を運び、寺の正面に、それをしばらく安置しておいたからである。葬儀の行列の後、遺体は五つの根元的要素に戻り、その精霊（魂）は寺へ行くと信じられているのである。この寺において、精霊（魂）の葬列は、最初、良い「業Karma」は天国へ行き、悪い「業」は地獄へ行くのであって、転生の後、良い精霊（魂）は人間となり、悪い精霊（魂）は動物になるのである。

そして、人々は、家庭にいる如何なる動物であっても、自らが上昇することができるために、彼らを救いたいと望んだならば、彼らに幸運をもたらす義務がある。それに加えて、貴方々は、世界に安寧をもたらしているトトイス totois を連れている、竜の像が

ある「サブタプタラ Saptapetala」と呼ばれている小さな祠をみることができますでしょう。

羽根をもったライオンの「ブルサヤッ Bersaya」といわれているもう一の像は、ブレレン、シンガラジャの社会と、その象徴である愛国の精神を現わしているものなのである。

シンガ Singa はライオンを意味し、ラジャ Raja は王を意味しているのである。その素晴しさによって、プラ・ダレム・ジャガラガには多くの訪問者が訪れるが、特に、ドイツ、フランス、スイス、イタリア、オーストリア、イギリス、オランダ、ベルギー、デンマーク、スウェーデン、スペイン、ノルウェー、ハンガリー、ギリシア等のヨーロッパ、そして、アメリカ、カナダ、日本、オーストラリア、ニュージーランド、そして、アセアン等々。

彼らは、この寺のユニークさと彫刻の独特さを知るために訪れるのであるが、それは、我々の先祖が想像力に関しての幅広い能力をもっていたということを証明していることによつてなのである。

彼ら、我が先祖は、最少限の技術を以て、このような素晴らしい寺を建設しうる高い能力をもっていたということを証明しているのである。そこには、ただ強い意志が保持されている(た)のと、結束のための基盤が形づくられており、それは、彼らの身体に流れている芸術家としての血の中にある感覚と動機づけとを以て生みだされたものなのである。

これらの全てが、彼らに、凝った高い文化の彫刻を実現させ、その使命を果たさせた想像力を生み出すことを可能にしたのである。そして、これは、この寺のユニークさに



プラ・ダレム・ジャガラガ (旧ブレレン王国)

ついて、私の人々に役立つために、示すことができるささやかな希望の現れなのです。

そして、私は、全てがうまくいくことと、皆さまの幸せを願っています。

クトゥ・スラドゥニャ KT. SURADNYA

ジャガラガ クチャマタン サワン シンガラジャ バリ インドネシア Jagaraga, Kec.
Sawan, Singaraja, Bali Indonesia

このように、同寺再建の由来が、1846年に始まったオランダによるバリ（島）への侵攻、それが最初に行われた所が島北部のブレレン王国であって、そこにあるシンガラジャであり、ジャガラガだったのである。それ故に、同寺および同地域ジャガラガがもつ歴史的意義が大きいということが分かる。

この点、ジャガラガに対するオランダの攻撃に関して、ウィラード・エイ・ハンナ Willard A. Hanna は、その著書の中で次のように述べているのである。

ジャガラガの防衛とオランダ
による攻囲 Jagaraga Defence
and Dutch Seisure

次の10日間、オランダ、バリ相方は、共に、ためらいながら作戦行動を展開していたのである。オランダ側はジャガラガへ至る道を調べたが、そこには障害物を移動しなければならぬだけでなく、砦を制圧するためには大変な努力をしなければ、そこへたどりつくことができないということが証明された。バリ人は、オランダ人が闘うか妥協するか否かについて確めることを決めようとしていたが、8月13日、君主達と侵入者との間の交戦について新たな展開が起こったのである。

そこで、バリ人側は、再び、光輝さと力の両方を示すための計画をたてたのだが、それは、死に至るまでの戦闘をするための完全な準備をすることだったのである。

相方は、再び、ジャガラガが平和裡に明け渡されることを話合ったが、バリ人側は、道路の障害物を取り除くことをすることなく、丘へと撤退したのである。ジャガラガでは、オランダ人は、既に、情報提供者によって知らされていたように、1846年の時のブレレンにおけるそれよりも更に堅固なバリケードが築かれているということと、その他の防備された箇所は全て町から放射状に広がっており、8メートルの深さの水が注がれた幅広い溝が、道路から接近することをはばんでいることを知っていたのである。

ミシエルズ将軍は、更に延期することなく、攻撃を開始することを決め、オランダ軍

は、8月15日の早朝、町の正面への彼らの到着のための道のりに展開されていた全ての抵抗線と堅固な防衛陣地を制圧して、ジャガラガの町へと進軍して行ったのである。町の中では、ディランティッ（筆者注 カランガスムの王子のグスティ・クトゥ・ディランティッ Gusty Ktut Dilantikで、クトゥ・スラドゥニヤ氏はグスティ・クトゥと記しており、著者のハンナによると、ブレレン王国、ジャガラガへのオランダの侵攻に対して、親戚の関係から隣国のカランガスム王国の王子のディランティッとブレレン王国の王 Rajaが協力し合って戦ったと記述しているのである）が、1万5千の人々を召集しており、そのうちの2～3千名はライフルで、他の者達は、10から20フィートの長さの槍で武装していたのだった。

深刻な犠牲を生んだ数回の試みの後、将軍は、正面攻撃をすることの危険を避けて、側面に対する作戦行動をとることにして精鋭部隊を派遣したのである。そして、翌早朝、この部隊は、最も西のはずれにある防禦線を突破することに成功し、背後から町の中へ突入していったのである。

従って、8月16日、午前11時には、オランダ軍は、ジャガラガがその支配下に入ったことを示す21発の号砲を発すると共に、オランダの旗を砦の上にはためかせたのである。しかし、ディランティと王侯達、そして、その軍隊の殆んどは、カランガスムおよびクルンクン（筆者注 島南東部のクルンクン Klungkung 王国）の指示に従って、秩序ある撤退をしていたのである。

ジャガラガにおけるオランダ側の損害は、33名の戦死者と148名の負傷者であったのに対し、バリ側のそれは数千を数え、犠牲者の中には、ある報告に従えば、ディランティの妻、ププタン Puputan（筆者注 オランダ軍に対する、バリ人による無抵抗での死による抵抗の行為）の厳粛な儀式に従って、殆んど陶酔状態によってオランダ軍の火線に向って進んで行って死んだ、高貴な生まれの女性の一団があったという。

戦争は、それが、突然手詰まりになる前にかろうじて再開したが、オランダ軍は、ジャガラガを越えて、陸上での輸送を更に進めることによる危険を冒すことの準備も、また、その意志も持つことをもしなかった。そこで、ミシエル将軍は、主な戦域を南部へ変更、それらを除いて、兵士をブレレンに撤退することを決意したのである。

そこは、カランガスムとクルンクンに対する作戦を指揮するためには都合の良い場所であると共に、海岸地帯なので、船からの連絡のための長い距離による危険を払う必要がなかった。デワ・アグン（筆者注 クルンクンの国王 Dewa Agung）に対する直接行動は、バリ人の速やかな降伏につながると彼は考え、そこで、彼は、軍隊を移動させ、艦隊を出航させるための命令を下したのである⁽²⁰⁾。

上記のハンナの文章にある如く、バリ（島）へのオランダの侵攻に際しての、北部のブレレン王国、そして、そこに存在したジャガラガ（村Desa地区）のおかれた立場の大きさを知ることができる。それとの関わりでみてみると、クトゥ・スラドゥニヤ氏の作成した「ブラ・ダレム・ジャガラガ」についての文章が如何に意味をもっているかということが分るのである。

そして、オランダによるバリ（島）侵攻の中で、ジャガラガに対する攻撃は、1849年に行われた第3次侵攻の一環としてのものだったとハンナは述べているのである。1846年に最初に始まったオランダによるバリ（島）への侵攻、それはブレレン王国においてなされたのである。これに際し、従来は、必ずしも友好的でなかったブレレン王国とカラングASM王国とが、国王同士が兄弟ということもあって、手を携えてこれに当たったのである。「ブレレン王グスティ・マドッヤ・カラングASM Gusti Madya KarangasemはカラングASM王グスティ・ヌグラ・カラングASM Gusti Ngurah Karangasemの長兄だったのである」⁽²¹⁾というように両国王は兄弟だったのである。

そして、第3王子のグスティ・クトゥ・ディランティッがカラングASMから加勢にきて、どちらかというとその主導権で以て攻防戦が展開されていっていたのである。

その後の、オランダによるバリ（島）侵攻の経過については、後述の吉田氏の著書からの引用によって知れるところであり、その詳細については今後の研究に委ねたい。

1846年に始まり、ジャガラガに対する攻撃を含むブレレン王国への3回にわたる侵攻は、その背景として、オランダのバリ（島）に対する考え方の変化が、時の国際情勢の進展に従って起こったことに由来しているといえるのである。



オランダ軍の上陸地 シンガラジャ港（旧ブレレン王国）

後に、オランダ統治下で廃止され、拙稿VIでも触れた如く、ジャワ（島）の大半を領有していたマタラム Mataram 王国を一時期悩ました、バリ（島）の奴隷あがりのスラパティ Surapati（? -1706）の乱にみられる、奴隷の存在とその輸出といったものの他、織物、米等といった、特に、みるべき産物のないバリ（島）は、経済的に、貿易上にあまり魅力のない所であり、大航海時代を招来したポルトガル、スペインにしても、ヨーロッパ人が渴望した香辛料が豊富なモルッカ Molucca（Maluku マルク）諸島等と比べて積極的に近寄ろうとはしなかったのである。

だが、オランダは、これら先行の国々とは一寸違っていた。ポルトガルに雇われていたことがあり、東インド諸島（インドネシア地方）への最初の渡航者となったハウトマン Cornelis de Houtman（? -1599）が1597年、ジャワ（島）の西部のバンテン Banten（バンタム Bantam）王国を皮切にした東インド（インドネシア地方）への航行の中で、バリ（島）にも訪れ、時の、ゲルゲル Gelgel 王朝に通商を求めた。その際、彼は、島の東部カラングスム王国に上陸して、ここから小さな船に乗りかえて、南東部にあるゲルゲルへ向ったのだと、オカ氏やガラガスム王家出身のドクター・アグン等がいていたが、当時、バリ（島）に大きな勢力をふるっていた同王朝へ向って進んでいったことになるのである。

そこでのハウトマンは、「彼と部下はこの島に夢中になり、王とすっかり仲よくなった」⁽²²⁾、そのため、「島に長く逗留したのち、一行のうちの何人かは新しい『楽園』の発見を報告すべくオランダに帰ったが、残り的人々はバリを去るのを拒んだ」⁽²³⁾といわれるように友好的なものだったようだ。

だが、「東インド諸島とヨーロッパの関係は、のちにオランダ東インド会社の出現によって暗転した」⁽²⁴⁾といわれるようになるのである。イギリスに後れること2年にして、1602年に設立され、インド等の南アジアや東南アジアにおいて、先行していたポルトガルやスペイン、そして、イギリスとの競争を経て次第に東インド諸島に勢力を扶植していったオランダ東インド会社は、様々な手段を以て、バリ（島）を支配する君主の好意をえようとしたが仲々効を奏さなかった。

そのため、「バリ人の敵に武器を売る一方で、その敵に対抗するための援助をバリ人に申し出て、見返りに利権を得るといった策略に訴えるようになった」⁽²⁵⁾といわれる巧妙な方法を取り、その勢力の浸透を計ったのである。

そして、それは、更に、バリ（島）の人々にとって不幸をもたらすことになるのである。「オランダ東インド会社は1793年にオランダ政府に接収されてみじめに崩壊をとげた」⁽²⁶⁾後、バリ（島）は、「災厄が始まった。ジャワのスラカルタのスルタンが、オランダ人に、自分が持ってもいなかったバリに対する『権利』を割譲したのだ。しかも、オランダはこれを宣言する手続きをいっさいとらなかった」⁽²⁷⁾のである。

こうした経緯を以て、東インド（インドネシア地方）、バリ（島）に勢力を浸透させていったオランダは、19世紀、1830年代シンガポール Singapoleでの拠点を確保したイギリスが、オランダの支配するジャワ（島）のバタヴィア Batavia（ジャカルタ Jakarta）やスラバヤ Srabaya を経由しないで、直接オーストラリア大陸へ行ける経路としてのバリ（島）と、東に位置し、カラングスム王国の支配下にあったロンボック Lombok（島）との間のロンボック海峡に着眼したことがオランダに刺激を与え、以後、オランダは、この地域への進出をより積極的に行うようになったのである。

東部バリ（島）は、ロンボック（島）を含み、ドクター・アグンの出身であるカラングスム王国（家）の支配地域であったが、こうした西欧列強の覇権争いが、東インド諸島（インドネシア地方）の小島バリ（島）、ロンボック（島）にも影響を及ぼすことになるのである。

オランダは、その勢力伸長について腐心、そのために、「なんとかしてバリの王家と条約を結び、王族の実権をおもてむき尊重しつつオランダの主権を認めさせようとやっきになった。しかしそうした意図をかぎつけたバリの王たちはなかなかいうままにならず、ついにオランダは武力に訴えざるをえなくなる。1849年にはまずバリ島北岸のブレレン王家と西部のジュンブラナ王家を武力で制圧して支配下においた。つづいて1894年にはロンボック島西部のバリ人王朝を滅ぼし、1906年にはバリ島南部のバドゥン王家とタバナン王家を、そして1908年にはバリ島の名目上の支配者であったクルンクン王家を全滅させ、残りの王家とも講話を結んで、ここにバリ島はその全体がオランダの支配下に入ったのである」⁽²⁸⁾と指摘される、オランダ人によるバリ（島）征服の経緯があったのである。

そして、オランダ人によるバリ（島）侵攻の発端となったブレレン王国征服については、



オランダ 東インド会社 倉庫（ジャカルタ）



旧オランダ総督府（ジャカルタ）

「1846年に難破船の積荷を差し押えるバリ人古来の権利をめぐる問題がおこり、初めてオランダの軍隊がバリ北部に派遣された」⁽²⁷⁾といういきさつがあったのである。

この難破船の取扱いについては、日本でも、「お舟さま」と称し、難破船を天からの授かりものとして、土地の者達が処分するという慣習があり、時に、難破しかけた船、生存者がいるにも関わらずこれを殺して無理矢理難破船として、これを処分したという話が伝わっているが、バリ（島）でもこれに類したことが行われたとしても不思議ではなく、それによってオランダの怒りをかったということはあることである。

こうした経緯で起こったオランダのバリ（島）侵攻の一端として、「ブラ・ダレム・ジャガラガ」の事件、そして、それに関連して、ハンナの記述にみられるジャガラガの攻防戦があったということである。

結

以上、本稿では、昨夏、今春のバリ（島）、ジャワ（島）訪問によってえられた様々な事柄の中から、日本人（軍）統治下での大きな問題であった米問題と「ロームシャ」の問題、そして、バリ（島）が、オランダの植民地として組みこまれていく楔機となった、バリ（島）北部に存在したブレレン王国へのオランダの侵攻と、それに伴ったジャガラガ地区（Desa村）での攻防戦について取りあげてみた。

これらの二つの問題は、バリ（島）が異民族の支配を受けていたという歴史的事実を説明するものであり、その異民族による支配の中でも、大きな問題ということがいえる。

人間の「生きる」については、時の流れとの関わりの中で、それは大きく左右されるので

あって、たとえ、オカ氏等のような王族であっても、はたまた、マット・ハイル氏のような庶民であってもそれは同じなのである。

歴史の潮流の中で、個人が、自らの「生きる」を如何に保持していくか、そこには、食糧不足で苦しめられたり、自らが好まない労働に従事しなければならないことが生じる場合があるのである。

そこには、如何なる理由があろうとも、民族の自立を阻むことがあってはならないということを感じさせられる。

その点で、次稿以降も、オランダによるバリ（島）支配について、更には、一時期、オランダに代って、同島を統治した日本について、ジャワ（島）を始めとするインドネシア地方との関わりで考察を進めていきたいと考えている。

注

- (1) 吉田禎吾編著『バリ島民 祭と花のコスモロジー』 弘文堂 平成5年 32頁
- (2) 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』 草思社 1996 137～8頁
- (3) 同上書 139頁
- (4) 同上書 139頁
- (5) 同上書 141頁
- (6) 同上書 143頁
- (7) 同上書 140頁
- (8) 榊原政春『-中尉の東南アジア軍政日記』 草思社 1998 251頁
- (9) 同上書 251頁
- (10) 同上書 251頁
- (11) 倉沢 前掲書 180頁
- (12) 同上書 180頁
- (13) 榊原 前掲書 115頁
- (14) 同上書 115頁
- (15) 吉田 前掲書 31頁
- (16) 倉沢愛子『二十年目のインドネシア日本とアジアの関係を考える』 草思社 1994 172～3頁
- (17) 同上書 173頁
- (18) 同上書 173頁
- (19) 吉田禎吾監修『神々の島バリ バリ・ヒンドゥーの儀礼と芸能』 1995 24頁参照)
- (20) Willard A. Hanna *Bali Chronicles* PERIPLUS 1976 P.P93～4
- (21) *ibid* p85
- (22) Covarrubias M. *Island of Bali* New York 1936 関本紀美子訳『バリ島』 平凡社 1998 70頁
- (23) 同上訳書 70頁
- (24) 同上訳書 70頁
- (25) 同上訳書 70頁
- (26) 同上訳書 70頁
- (27) 同上訳書 70頁
- (28) 吉田編『バリ島民』 30頁

Research Note

The Social Climate and Linage in Bali

Masamichi MATSUBARA

Until last time, I tried to write the essay about relation between Bali with Jawa and other countries, nations.

This time, I try to write about three points of Balinese and Jawanese problem in the essay.

First is the problem of rice, second is ‘ロームシヤ Rourumusha’ means slave laborer in Asia under Japanese rule at world War II, third is Dutch’s expedition to north ern part of Bali, Beleleng Kingdom in 1848, especially, Jagaraga’s offensive and deffensive battle is very important matter for Balinese.

After this, Dutch’s power penetrats to all over Bali.